

獨協医科大学漢方研究会

第1回漢方研究会は、薬事委員会の下部組織として昭和53年12月20日に開催された。以下にそのあゆみと活動状況を記す。

1) 獨協医科大学内でのあゆみ

医師、薬剤師、MRで構成され、発足当初は主に「漢方概論」、「処方解説」などが輪読されたが、平成元年頃から中医学の教科書が中心となった。平成16年12月までに開催された回数は、180回である。なお、漢方研究会発足から5年間の活動を、「獨協医科大学病院漢方研究会 5年間のあゆみ」として掲載した。この間に、下記企画行事のように獨協医科大学漢方研究会中国医療視察団を結成して訪中し、また本研究会のメンバーは栃木県漢方研究会学術訪中団の団員として伝統医学の視察やシンポジウムなどに参加した。

【漢方研究会で輪読した図書】

傷寒論解説（創元社）、新版 漢方医学（日本漢方医学研究所）、臨床中医学（自然社）、図説 東洋医学（学研）、針灸治療学（医歯薬出版株式会社）、中医学入門（医歯薬出版株式会社）、中医処方解説（医歯薬出版株式会社）、漢薬の臨床応用（医歯薬出版株式会社）、中医八綱解説—診断と治療—（自然社）、図説 漢方処方の構成と適用（医歯薬出版株式会社）など。

2) 学生の参画

漢方研究会発足当初、学生の参加はなかった。そして当時主要なメンバーであった医師が次々と大学を退職して開業し、また薬剤師が獨協医科大学越谷病院に移動していった、昭和63年頃から、学生が少しずつ参加するようになった。平成3年に本学の課外活動として東洋医学研究会が発足し、学生が中心となって活動するようになった。現在、東洋医学研究会に入部している学生は17名で、毎秋開催される学園祭にはテーマを決めて研究発表を行っている。

【学生が参考としている図書】

中医学入門（医歯薬出版株式会社）、図説 東洋医学（学研）、入門漢方医学（南江堂）、医学生のための漢方医学 入門の手引き（医療法人清風会）など。

3) 学生教育

現在、各医科大学（医学部）の教育ガイドラインは、「医学教育モデル・コア・カリキュラム（医学における教育プログラム研究・開発事業委員会）」に従って作成される。この項目の中に、E診療の基本、2 基本的診療知識、（1）薬物治療の基本原理の到達目標として、「和漢薬を概説できる」という項がある。

このガイドラインに従うならば、本学でも漢方薬の講義が必要となる。しかし、本学では薬理学の授業で和漢薬についての講義は行われていない。麻酔科学として、「疼痛管理、ペインクリニック」の講義の際に東洋医学による疼痛治療を概説し、また少人数ゼミで東洋医学について教授してきたが、来年度のカリキュラム再編成によって廃止された。今後、本学での東洋医学の教育のあり方について考えている。

4) 企画行事

- (1) 獨協医科大学病院漢方研究会中国医療視察（昭和55年4月23日～5月7日）
参加者19名
（北京、西安、南京、上海、広州、香港）
- (2) 栃木県漢方研究会学術訪中（昭和58年10月9日～10月18日）
参加者18名
（上海、杭州、桂林、広州、香港）
- (3) 中国医療施設視察（昭和62年4月26日～5月4日）
参加者13名
（上海、南京、蘇州、杭州、紹興）
- (4) 津村順天堂茨城工場見学（昭和63年5月15日）
参加者25名
（茨城県稲敷郡阿見町吉原）

「獨協医科大学病院漢方研究会 5年間のあゆみ」

1. 研究会開催		2. 研究会内容	
昭和53年度	1回	1. 漢方概論	24回
昭和54年度	11回	2. 処方解説	10回
昭和55年度	9回	3. 映画供覧	1回
昭和56年度	8回	4. 帰朝報告	2回
昭和57年度	8回	5. 招待講演	6回
昭和58年度	8回	6. 針灸概論	1回
計	45回	7. シンポ打合せ	1回

（昭和58年12月現在）

（文責：北島敏光）

自治医科大学東洋医学研究会

自治医科大学東洋医学研究会は、「現代医学の立場から東洋医学を正しく評価し、応用していくことを通じて、特に漢方医学を実際の臨床に取り入れ、その診断方法並びに治療方法を研鑽する」ことを目的とし、1989年に玉田太郎教授（産婦人科及び地域医療）を代表世話人として発足した。自治医科大学に勤務する医師・薬剤師を主体に、自治医科大学の卒業生および医局出身者などによって構成され、自治医科大学の学生を準会員としている。

これまで、以下に示すように年間1～4回の講演会を開催し、平成17年の2月までに34回の講演を行った。また、腹診の習得を目的とした実習会も3回開催した。これらの講演会と実習会は、学外の医師および薬剤師にも公開しており、毎回、多くの参加者を得て活発な質疑応答が行われている。なお、代表世話人は、玉田教授の退任後、徳江章彦教授（泌尿器）が引き継ぎ、平成16年からは市村恵一教授（耳鼻咽喉科）が就任している。

自治医科大学では、学生に対する東洋医学教育の充実と地域での実地臨床に役立つ東洋医学の知識の普及をはかることを目的として、平成17年1月に地域医療センターのなかに東洋医学部門が新設された。以前から卒前・卒後教育に貢献してきた自治医科大学東洋医学研究会のさらなる発展が期待される。

これまでに開催した講演会の一覧

回	年月日	演 題	講師(敬称略)
1	89.11.29	地域医療における漢方療法の位置付け	大澤 仲昭
2	90.6.7	臨床医のための漢方医学入門	松田 邦夫
3	11.8	フリーラジカルと和漢薬	吉川 敏一
4	91.7.4	心身医療と漢方	河野 友信
5	92.4.23	痛みと東洋医学	兵藤 正義
6	93.6.17	中医学入門 花粉症	羅 小星
7	7.16	中医学入門 めまい	羅 小星
8	10.7	呼吸器疾患 抗癌剤の副作用防止を目的とした漢方の使用経験	杉山幸比古 古田 一裕
9	12.3	中医学入門 泌尿器科疾患	羅 小星
10	94.1.21	頭痛の常用処方について	村松 慎一

回	年月日	演 題	講師(敬称略)
11	94. 3. 18	コンピューターによる漢方処方を試み	竹田 俊明
12	5. 27	漢方の適応となる痛み	粕田 晴之
13	95. 9. 29	和漢診療学における診断とその治療	寺澤 捷年
14	96. 2. 22	漢方薬の効果的活用法	花輪 壽彦
15	4. 23	漢方診療の注意点と腹診の実際	花輪 壽彦
16	6. 18	補剤の上手な使い方	花輪 壽彦
17	10. 4	消化器領域における漢方診療	佐藤 弘
18	97. 2. 14	漢方診療の実践的運用法 ー随証治療の実際ー	山田 輝司
19	7. 4	証の決定法	松田 邦夫
20	9. 18	アレルギー疾患、膠原病に対する漢方治療法	丁 宗鐵
21	98. 1. 23	漢方薬はなぜ効くか	田代 眞一
22	10. 2	大学病院における漢方外来での治療の実際	福澤 素子
23	99. 2. 5	癌患者に対する漢方外来の有用性	星野恵津夫
24	7. 4	皮膚疾患の漢方 ー薬理作用からのアプローチー	諸橋 正昭
25	00. 2. 4	心療内科と漢方	久保 千春
26	7. 6	漢方の勉強の仕方と実践方法	長坂 和彦
27	01. 2. 16	内科(特に消化器領域)における漢方入門	佐藤 弘
28	7. 6	科学としての漢方医学	本間 行彦
29	02. 2. 16	アレルギー疾患に対する漢方	黄 麗輝
30	10. 4	一般診療における漢方治療ー泌尿器科領域についてー	石橋 晃
31	03. 2. 14	不定愁訴における漢方治療	石野 尚吾
32	10. 24	臨床における実践漢方療法	稲木 一元
33	04. 10. 29	大学における漢方の臨床、教育、研究	渡辺 賢治
34	05. 2. 25	プライマリーケアにおける漢方	下田 哲也

1	99. 1. 24	漢方特別実習会 「腹診実技指導」	寺師 睦宗
2	9. 5	漢方特別実習会 「腹診実技指導」	寺師 睦宗
3	11. 12	漢方特別実習会 「腹診実技指導」	大野 修嗣

(文責：村松慎一)

国立栃木病院漢方医学入門シリーズ

第1回目の「漢方医学入門シリーズ」は昭和60年11月25日のことであった。

これより先、昭和57年末、国立栃木病院「漢方勉強会」が始まった。内科の小松崎 修 医長、同じく山内 浩医長、田中幸房放射線科医長、関口直男皮膚科医長、それに産婦人科の柏瀬成一医員、内科非常勤の筆者らが月に一度医局に集まり、漢方方剤を勉強し、症例の検討をし、古方の大家大塚敬節の診療ビデオなどを見た。指導者は村田高明産婦人科医長で、この勉強会が発展し、病院外からも広く参加者を募って「漢方医学入門シリーズ」になった。講師は勉強会のメンバーが務めたが、すでに20年を経過した現在、担当した講師は全員転勤、退職した。しかし、生薬薬理解説を担当した小野則夫薬剤師は薬剤科長として復帰している。村田医長の肝煎りで始まったシリーズ最初のプログラムを、参考資料(2)として、第7回と共に次ページに掲載する。

シリーズ最終回は昭和62年7月20日で第17回であった。午後6時30分から9時まで、下記の7つの講座が並び、進行は山内浩内科医長が行い、終了後懇親会が行われた。

①漢方健康相談のビデオ、②漢方方剤解説／人参湯など（津村順天堂）、③漢方医学の基礎／温病論（戸村）、④黄帝内経素問（村田）、⑤古医学入門／傷寒論（小松崎）、⑥生薬薬理解説／川？・車前子（小野）、⑦食養／泥鱈、とうもろこし（真島）。

この足掛け3年にわたるシリーズ中、筆者と小松崎内科医長はワープロを使って講義内容を作成し、当時の機種には搭載されていない漢字を自分で作り、その出来栄を自慢したものである。当時の講義原稿を見ると、はじめは斜めの部分がぎざぎざになる粗末な字体であったのが、次第にきれいな明朝体になっている。二人で競って最新式のワープロを購入したからである。

村田産婦人科医長を除いて、この入門シリーズの講師たちは、漢方医学を他人に講義するだけの力を持っていたわけではない。「中医学はわからないので講義できない」という筆者に村田医長は「わかっている」と言った。講義できるように勉強しなさいということであった。その村田医長が国立栃木病院を去ることになり、17回でこのシリーズは終了したのであるが、入門シリーズの講師たちはかなり勉強したと思う。従って、このシリーズが受講者にどれほどのインパクトを与えたのかはわからないが、少なくとも講師として参加した国立栃木病院の医師や薬剤師、栄養士、看護師には、大きな財産をもたらしたことは間違いない。即ち漢方医学に対する理解と深い愛情である。

昭和57年に発足した栃木県漢方研究会へも、国立栃木病院の勉強会参加者、さらに入門シリーズの講師らが多数演題を発表している。村田高明、山内 浩、田中幸房、柏瀬成一、坪田一男、緑川由紀夫、戸村光宏、関口直男（発表順・敬称略）である。漢方医学の苗がしっかり根付いたのだ。

[※]現在、独立行政法人国立病院機構栃木病院と名称を変更している。

参考資料（１） 漢方医学入門シリーズ内容

漢方方剤の解説（村田高明・秋元清昭）

漢方医学の診療法・黄帝内経素問（村田高明）

古医学入門／傷寒論（小松崎 修）

漢方医学の基礎（戸村光宏）

各科領域の漢方治療（各科の医師）

生薬薬理解説（*小野則夫）

食養（**坪井康人、後に真島）

日本の医療史（***矢島正純）

*薬剤師
**栄養士
***理学療法士

参考資料（２） 当時のプログラム

漢方医学入門シリーズ 1

昭和60年11月25日

1. 漢方の診断と治療……………映画
2. 漢方療法の現況……………村田
3. 漢方医学の基礎……………戸村
4. 古医学入門（傷寒論序文）……………小松崎
5. 生薬薬理解説（柴胡、甘草）……………小野

記念すべき入門シリーズ第1回目のプログラム

漢方医学入門シリーズ 7

昭和61年5月19日（月）

国立栃木病院地域医療研修センター

1. 産婦人科と漢方……………映画
 2. 日本の医療史(4)……………矢島
 3. 産婦人科領域の漢方療法の現況……………柏淵
 4. 漢方医学の基礎（気血水(3)）……………戸村
 5. 古医学入門(7)（傷寒論）……………小松崎
 6. 生薬薬理解説（白朮、猪苓）……………小野
 7. 食養（しいたけ、ふかのひれ）……………坪井
- 進行 山内(問合せは、産婦人科 村田まで)

第7回入門シリーズのプログラム。項目も増えている。

（文責：戸村光宏）

宇都宮漢方懇話会

宇都宮漢方懇話会は、漢方医学を現代医学に活かすことを趣旨とし、当時の国立栃木病院山内 浩内科医長を会長として、戸村光宏先生、国府正英先生、筆者が中心となり、平成8年5月発会した。発会当初、宇都宮駅ビルのパセオや駅東のホテルフェアシティを会場としたが、現在は宇宮市内の一番町クリニック内で定期的会合をもち、下記一覧のごとく、症例検討や弁証論治など、やや専門的な研究会を目指している。

(文責：手塚隆夫)

回	年月日	内 容	回	年月日	内 容
1	96. 5. 14	症例検討・ほか	23	98. 9. 14	八綱弁証Ⅳ
2	7. 30	症例検討・ほか	24	10. 19	八綱弁証Ⅴ
3	10. 15	症例検討・ほか	25	11. 16	八綱弁証Ⅵ
4	12. 17	症例検討・ほか	26	12. 14	陰陽の失調について
5	97. 2. 18	症例検討・ほか	27	99. 1. 18	小児の漢方について
6	4. 15	漢方概論 (気血水)	28	2. 19	糖尿病・インフルエンザ
7	5. 27	漢方概論 (気血水)	29	3. 10	漢方概論
8	6. 24	漢方概論 (気血水)	30	4. 27	中医学解説・症例検討
9	7. 29	症例検討・ほか	31	5. 21	補中益気湯解説・ほか
10	8. 26	気管支喘息・ほか	32	6. 22	中医学解説・症例検討
11	9. 22	八綱弁証Ⅰ	33	7. 24	中医学解説・症例検討
12	10. 21	臓腑弁証 一津一	34	8. 20	中医学解説・症例検討
13	11. 17	臓腑弁証 一肝一	35	9. 28	中医学解説・症例検討
14	12. 22	臓腑弁証 一肺Ⅰ一	36	10. 29	中医学解説・症例検討
15	98. 1. 19	臓腑弁証 一肺Ⅱ一	37	11. 19	中医学解説・症例検討
16	2. 26	症例検討・ほか	38	12. 17	中医学解説・症例検討
17	3. 27	症例検討・ほか	39	00. 1. 25	中医学解説・症例検討
18	4. 8	症例検討・ほか	40	2. 24	中医学解説・症例検討
19	5. 18	東洋医学会予演会・ほか	41	3. 21	中医学解説・症例検討
20	6. 22	八綱弁証Ⅱ	42	4. 28	五臓の概念 (総論)
21	7. 27	八綱弁証Ⅲ	43	5. 26	五臓の概念 (総論)
22	8. 19	東洋医学会県部会予演会	44	6. 16	五臓の概念 (脾)

回	年月日	内 容	回	年月日	内 容
45	00. 7. 19	五臓の概念(肺)・夏季の漢方	74	03. 1. 24	アレルギー性鼻炎と漢方
46	8. 18	東洋医学会県部会予演会	75	2. 28	アトピーと漢方Ⅰ
47	9. 22	腎の概念について・ほか	76	3. 28	アトピーと漢方Ⅱ
48	10. 20	耳鳴について・ほか	77	4. 25	血熱についてⅠ
49	11. 17	めまいについて・ほか	78	5. 30	血熱についてⅡ
50	12. 20	症例検討・ほか	79	6. 27	漢方と免疫Ⅰ
51	01. 1. 26	六君子湯解説・ほか	80	7. 25	漢方と免疫Ⅱ
52	2. 6	便秘について	81	8. 22	東洋医学会県部会予演会
53	3. 23	慢性肝炎	82	9. 26	中医学解説・耳鼻科領域
54	4. 20	慢性胃炎Ⅰ	83	10. 31	中医学解説・心療内科領域
55	5. 25	慢性胃炎Ⅱ、耳鳴	84	11. 21	中医学解説・症例検討
56	6. 22	婦人科疾患	85	04. 2. 27	中医学解説・症例検討
57	7. 27	夏季不定愁訴について	86	3. 26	中医学解説・症例検討
58	8. 31	気血水について	87	4. 23	中医学解説・症例検討
59	9. 28	活血と補陰Ⅰ	88	5. 28	東洋医学会予演会
60	10. 26	活血と補陰Ⅱ	89	6. 18	中医学解説・症例検討
61	11. 30	五臓についてⅠ	90	7. 23	中医学解説・症例検討
62	12. 28	五臓についてⅡ	91	9. 17	中医学解説・症例検討
63	02. 1. 25	鼻炎について	92	10. 15	中医学解説・症例検討
64	2. 22	生薬についてⅠ	93	11. 26	中医学解説・症例検討
65	3. 29	生薬についてⅡ	94	05. 2. 25	中医学解説・症例検討
66	4. 26	五臓について	95	3. 25	実施予定
67	5. 24	東洋医学会予演会			
68	6. 28	頭痛について			
69	7. 26	八綱弁証Ⅶ			
70	8. 23	東洋医学会県部会予演会			
71	9. 27	血の概念について			
72	10. 19	津液について			
73	11. 29	漢方概論			

(付)「栃木県漢方研究会・中国医療視察」報告記

昭和55年4月23日から15日間、獨協医科大学病院漢方研究会の主催で中国の医療事情を視察してきた。団員一行は、医師5名、薬剤師2名、薬局関係者11名、JTB随員1名の計19名で、北京友誼医院(670床)、西安医学院第一附属医院(913床)、南京江蘇省中医学科学院(350床)、上海中医学科学院附属曙光医院(450床)の4総合病院ならびに上海人民公社の診療所を訪問した。

今回の企画は主催を“漢方研究会”と謳ったため、漢方薬による治療や針治療の視察が主となり、一番の関心事であった針麻酔による手術は、上海でやっと見る事ができた。中国医療は4,000年の古い歴史を持つ多様なものがあり、限られた都市での短時間の視察では到底その実態をつかみ得るものではない。そこで、以下いくつかの点について感想を述べて視察報告とする。

1. 医学教育

中国では、医師になるには小学校に入学してから最低でも15年かかり、医学部は現在5年制で、中国医学と西洋医学の両方の教育がなされている。医科大学は全て国立で中国全土に91校あり、1学年300~400人。卒業後は医師国家試験はなく、西医になるか中医になるかは本人の選択による。現在、医療従事者(医師ならびに医務衛生技術員)は全土で約120万人おり、中医、西医の数はほぼ同数、また最近では女性の医師が多くなっている。女子のはだしの医者“紅工医”と呼び、医師の指導のもとに地域の衛生予防、予防注射、避妊指導、漢方薬草の処方、投薬等の仕事に携わっている。

因みに、中国では産休は56日であり、3人以上の出産には制限があり、避妊薬は無料で街の薬局にて求められている。

2. 中国の医療

中国の医療は中医と西医の二本立てである。かつては一部の過激分子によって、この両者は没交渉というよりもむしろ反目情態にあった時期もあったようだが、現在は互いに協力して新しい中医学の創造を目指し、日夜努力を重ねている。中国では漢方を「祖国医学」として尊重し、現在政府の指導によって漢方の科学研究が強力に押し進められており、新しい中西合作独自の治療体系を開拓していこうとしている。今回訪れたどの病院でも、この両者の結合を強調しており、難症例患者の治療についても両者討議の上で方針を決めているとのことであった。

治療費は、公費医療制度により労働者本人は無料で(上海の人民公舎では一人1年間に日本円で約240円を納める)、患者はその希望により西医、中医どちらでも受診できる。

病院の建物や医療機器はきわめて質素で、乏しい資材を大切に使用し、かつ工夫して効果をあげているのが印象的であり、浪費することに不感症となっている我々は、少し反省しなくてはならないと思った。

3. 針治療

およそ20例の針治療の臨床例を見させていただいた。針灸科が独立した診療科として病棟を持ち、針麻酔の進歩と同様、薬物治療法を行わず針灸治療のみの治療と研究を意欲的に行い種々な疾患の治療を行っていた。

ギラン・バレー症候群という、感冒・下痢に引き続いて起こる末梢神経炎には胃腸系統の経穴が有効であるなど、長い臨床経験により疾病の本質を衝いていると感じられた。しかし、疾病とその病因解明のための剖検率が数%にも達していない現状や、治療成績の統計資料を入手できなかったことは残念であった。

4. 針麻酔

上海中医学院附属曙光医院で、針麻酔による手術をみる機会を得た。手術は十二指腸潰瘍に対する胃切除と甲状腺腫瘍摘出術である。針麻酔の経穴は、胃切除術の場合、両下肢外側にある上巨虚^{じょうきょこ}と足三里の2カ所で、機械により捻転を加えて行っていた。また甲状腺腫瘍摘出術の場合、両側頸部の扶突^{ふとつ}に針を2本ずつ刺して通電していた。針麻酔の効果は想像していたよりも良く、手術手技も的確のように見うけた。一般に頭部の方が（扁桃手術を除く）麻酔効果がよく、下肢に行くほど効果が乏しいとのことであった。

針麻酔がなぜ効くのかという質問には十分な答えが得られなかったが、針の刺激により生体内にモルフィン様物質（エンドルフィン）が遊離してくると説明していた。また、針麻酔の欠点としては、1）鎮痛不全、2）腹部手術時の牽引痛が十分とれない、3）腹部の筋弛緩が十分得られないということであった。一般に、手術および麻酔に使用する器材は一時代古く、再生ガーゼを使用し、ディスプレイの器具は見られなかった。

5. 漢方薬

今回視察の主目的は、漢方薬に関するものであった。中国で漢方薬として使用している草根木皮の種類は1,500種あり、そのうち繁用されているのは約500種。病院在庫（約400種）以外の草根木皮は処方箋を出し、街の薬局で買ってもらおうとのことであった。南京の病院では、細末化した漢方薬の調剤を近代的なコンピューターを使用して処理しているかと思えば、街の薬局では今もって原始的な分銅秤を使用して計量をしていた。

また、どこの病院においても漢方薬の注射剤を製剤化しており、蒸留器で2回蒸留すれば筋注とし、3回蒸留すれば静注として使用、その品質検査は中央検査所で行っているとのことであった。

6. 人民公社

南京で迎えた5月1日メーデーの日、人民日報は中国人口を9億7,920万人余と報じた。前年の1,283万人増(1.17%増)は、東京都が一つ誕生した勘定となり、今や世界の1/4は中国人という一大国家となった。

1958年に成立した人民公社は、人口およそ3万人程度を規準として構成された小地方区組織である。農民の協力と団結を強め、農作業を大規模かつ合理的に行って生産を高める狙いをもち、現在全土で5万数千の公社が組織されている。

一日上海郊外にある萃庄人民公社(14,408人/3,766戸)を訪れ、33歳の若い隊長さんの案内で医療施設、水利運輸、灌漑、農業、牧畜、養鶏、キノコ栽培等の現場を見学した。そのあと家庭訪問をして質素な生活の実態を見せてもらった。平均一日8時間労働で、各人10点満点で自己評価をして記録し、その成績によって作物の分配が行われるという。公社の人と同じテーブルで、生産されたばかりの新鮮な食品による昼食をいただきながら、この国の人々の国造りに寄せる熱意を感じた。

会議室には毛沢東や華国鋒のほか、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの大きな肖像が掲げられてあり、中国の将来の姿を垣間見せられた。

7. 勉強会

北京、南京、上海のホテルの会議室で、夕食後約2時間半、全員で勉強会を行った。入手した医療事情についての独自の解釈の是正と情報交換、そして翌日視察する病院の紹介とその見どころの解説を目的としたもので、短期間の中国視察で得た学習をより効果的に纏めることができた。北京から全行程を同行してくれた胡、楊両通訳者にも同席を願い、二人に不明な点を説明してもらったことは、勉強会の主旨をより充実してくれた。熱のこもった討議風景は、翌日、二人に「こんな真面目な団体は初めてだ」といわれた。

8. まとめ

最も近くで遠かった中国が、長い間のベールを脱いで我々にも行ける近さとなった。短期間の走り旅行ではあったが、多くの人々と接することによって黄河、揚子江の2大大河と、黄土の大自然の中で戦い生き続けたこの国の人々の生き方や考え方の一端を知ることができた。また、4,000年の歴史に培われた重厚な諸文物の深みに、わが国の文化の原型をみた。ヨーロッパを飛び出したアメリカと同じく、中国大陸の文化を手本とした日本。ここでは自由な実験的試みができるが、どこにも逃げようのない中国は、その歴史の重みの桎梏に耐えている。明治以降我々の抱いているこの国に対する屈折感は、一度この国を訪れて現状をつぶさにみなければ矯正し得ないものと痛感した。

獨協医科大学「学内だより」No.71 昭和55年6月刊 (団員の分担執筆)

関東甲信越栃木県部会
目で見るとあゆみ

社団法人日本東洋医学会

第48回関東甲信越支部会

サテライトセッション

日本東洋医学会の新発展を期する会

栃木県部会第1回教育講演会

ある日の役員幹事会

第1回市民公開講座

第2回市民公開講座

第3回市民公開講座

栃木県部会役員



宇都宮グランドホテル

学術講演会会場



獨協医科大学病院



国立栃木病院



宇都宮市救急医療センター



ホテル・ニューイタヤ



宇都宮市文化会館



栃木県総合文化センター

社団法人日本東洋医学会

第48回関東甲信越支部会

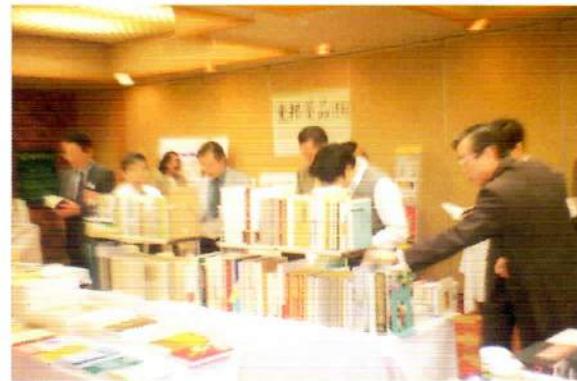
平成3年10月27日(日)
ホテルニューイタヤ



会場風景



会員懇親会



関係図書コーナー

サテライトセッション

平成3年10月26日(土)



ホテルニューイタヤ正面玄関



会場風景

日本東洋医学会の新発展を期する会

平成3年11月10日(日) 東京飯田橋グランドパレス



日本医学会加盟を祝して



栃木県部会第1回教育講演会

平成4年9月13日(日)
国立栃木病院



国立栃木病院研修センター

ある日の役員幹事会

平成17年3月6日(日)



栃木県総合文化センター レストラン・オーベルジュ

第 1 回 市民公開講座 平成15年2月11日 (火)

栃木県総合文化センター 3階第1会議室

日本東洋医学会栃木県部会
第1回 市民公開講座「漢方で元気」

日時 平成15年2月11日(火) 祝日 午後2時~4時

会場 栃木県総合文化センター 3階 第1会議室
 定員：150名 宇都宮市本町1番8号 (栃木県庁前)

メインテーマ：漢方で元気

□講 演：「不眠症」手塚隆夫先生 (一番町クリニック)
 「花粉症」金子 達先生 (金子耳鼻咽喉科医院)
 「冷え症」奥田圭子先生 (獨協医科大学麻酔科)
 「頭痛」村松慎一先生 (自治医科大学神経内科)

□司 会：関口直男 (比企病院皮膚科部長)
 前・日本東洋医学会・栃木県部会副会長
 徳江章彦 (自治医科大学泌尿器科教授)
 自治医科大学東洋医学研究会会長

□総合司会：粕田晴之 (国際医療福祉大学教授)
 日本東洋医学会・栃木県部会会長

参加ご希望の方は、はがきまたはFAXで、住所、氏名、年齢に、「漢方で元気」聴講希望と明記し、2月7日までに下記・事務局までお送り下さい。先着順 (定員150名) に聴講券をお送りします。
 なお、漢方相談ご希望の方は、漢方相談と併記し、相談内容を明記して下さい。当日、会場での時間の許すかぎり、一時的な対応で回答させて頂く予定です。

主催：日本東洋医学会関東甲信越支部・栃木県部会
 後援：宇都宮市
 下野新聞社、栃木放送、とちぎテレビ
 宇都宮市医師会、栃木県医師会、栃木県保険医協会
 栃木県薬剤師会、栃木県病院薬剤師会
 自治医科大学東洋医学研究会、国際医科大学東洋医学研究会

■はがき宛先 〒329-0498 河内郡南河内町薬師寺3311-1
 (事務局) 自治医科大学 麻酔科学部門「漢方で元気」宛て
 FAX：0285-44-4108



会場風景

第 2 回 市民公開講座 平成16年2月11日 (水)

栃木県総合文化センター サブホール



特別講演「心のケアと漢方」 水島広子先生

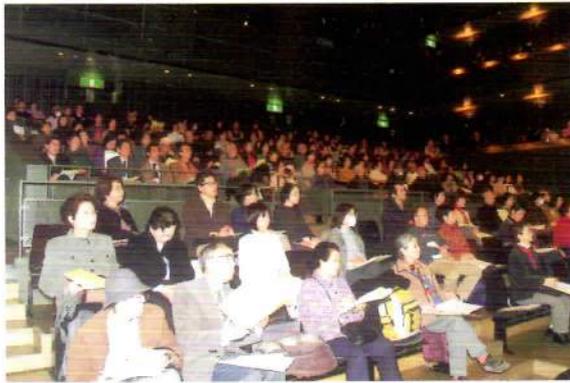


会場風景

第3回市民公開講座

平成17年3月6日(日)

栃木県総合文化センター サブホール



熱心な参加者

会場風景



栃木県部会役員 総合文化センター中庭(平成17年3月6日)

跋

ここに「日本東洋医学会栃木県部会のあゆみ」を発行することができました。

これを纏めるにあたり、その前身である「栃木県漢方研究会」の設立、ならびにその原動力となった栃木県下の漢方に関心を持つ多くの医師や薬剤師たちの、今日に至るまでの学術発表をも記録に留めることにしました。

改めて、「栃木県部会」に移行した平成4年6月に開催された第1回から、最近までの学術講演会の演題を一覧しますと、確実に成長・充実・発展しているのが分かります。また、本県は2回の関東甲信越支部総会学術講演会を担当してその責を果たすと共に、関東甲信越地区の諸先生方と交流を深めることができました。そして最近は、「市民公開講座」を開催して漢方医学の啓蒙に努めるなど、本会の活動も盛会となって同慶に堪えないところです。この間、多くの先生方に宇都宮市までご来駕願って「特別講演」をいただき、本会発展にお力添え下さいましたことをこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

このたび「栃木県部会のあゆみ」を編むにあたっては、日本東洋医学会事務局職員ならびに青山杵淵クリニック・杵淵 彰院長、元獨協医科大学薬剤部・建部 守部長、(株)ツムラ宇都宮営業所および元(株)ツムラ社員・吉永 豊氏、時田完司氏に資料の提供を願うなど、多大なるお力添えをいただきました。記してここに感謝の誠を捧げます。

栃木県における漢方医学の灯を、さらに盛り上げていくことを願って跋に代えます。

平成17年3月

越井 健司

編集担当：金子 達 越井 健司 日野原 正

社団法人日本東洋医学会関東甲信越支部

栃木県部会のあゆみ

発行 平成17年3月10日
発行人 関東甲信越支部栃木県部会
代表 粕田 晴之
〒329-2763 栃木県那須塩原市井口537-3
国際医療福祉大学臨床医学研究センター麻酔科
印刷 有限会社 大橋 写植
〒320-0862 栃木県宇都宮市西原2-2-10